

765
50

八男女装束抄

後附

765
516



源氏男女装束抄後附目錄

○ 春冬のよきぬえく 夏乃初の衣いろく

○ 又月より秋まで此初色を 九月九日よりきぬえく

○ 十月より架五節やあ乃衣いろく

○ 春冬此單いろく 夏のいろめ此單

○ 六月より秋まで乃單重 十月より五節まで乃單

○ 春冬乃表著いろく 夏乃初のいろ此の色

○ 五月又日より秋まで乃表著いろく

○ 十月より架五節まで乃いろく

源氏男女装束抄後附

○ 正月の小掛いろく 夏乃初の小掛乃夏
六月より秋まきくれ小掛ら死色く
十月より又夏まきその小掛いろく

○ むと魚乃事

○ 打ち虫小掛

○ 袴小掛

○ 女房褌乃装束

○ 志小掛いろく色の

○ 唐衣小掛不著事

○ 表着織物小掛緩人およ小掛く斜小掛ありき

○ 扇小掛の事

○ かさ小掛人乃事

○ 表小掛袴小掛ありき

○ 胡曹抄小掛さぬの冬小掛れ事

○ 藻塩草小掛き虫乃いろく小掛の事

衣ハ草のとり

きりゆりり古

今同。今按

女房の衣裳上

古中古後世各

異同ありて一准

ありて衣服令

延喜式西宮記

おと小載らる

石皆参差あり

又そのしらなき

一わらりり

とゆりも後古に

ありあり今此

書にあらせりハ

九一儒院所世

源氏男女装束抄後附

○女官飭抄抜書

春冬のさぬえく

みかこれか井乃きぬ。くまおの自ひれさぬ

くま紅くまとくま。くまくまかぬのくまゆくまくまくま

あられと。あみほひあみ上あみひあみくまあみくまあみ

さね乃うと扇さねくまさねくまさねくまさね。梅れさぬ

あむとあろ。はばあむくまあむくまあむくまあむくまあむ

ほりり紅梅ほりくまほりくまほりくまほりくまほり

山本の花堂
色目乃やうに
受たり但今
世は女房乃
官取とて
各々替りあ
のこほり志
四季乃又目
あはれは
善角の次
亦古今相違
た

○ 卯梅よりいひ
うらら梅
○ 桜うさね
うらら梅
○ 山ざさみほ
うらら梅
○ 花やまゆ
うらら梅
○ 紅ほく
うらら梅
○ 菖かき
うらら梅
○ うへ志ら
うらら梅
○ 白うら
うらら梅
○ かし梅
うらら梅
○ 蒲
うらら梅

菊うたの夜 表す
裏花田

此うら梅
月まで梅
四月は給
りらひい
わや何め
公松や
へさ沖

五葉ハス
甲一ハス
ワウハス
もワウハス

かきねらさい只今の人のみより好くは
しつゝもらひひつと又うらくいきぬひを
川小阜とくさるうさひ三つかうのうら
色子細なりと云

夏れいめののさぬりく

表薄紫裏青

あらうさね ○卯柳下同のうね おひてあらく

此糸のほくさねよあはよおひ一月

中、給のさぬりくといむくハ夜更の草

とそ精好セイゴウれす白ナリいつ進もとかかみ

更衣草夫木集
久安百首俊成卿
亥之ハ夜くを
して山川の
うつさぬりと
あふまあり
精好の名り
諸國乃調庸絹
鹿悪りと貢進
すといまわ

たすひて精好
かりととまう
へーとのあかり
延喜二年ハ格
入る

らさいまゝ賀茂糸乃日ハまゝの
夜とりらひい事と作

六月より秋までハ夜ハ短く

はらえ乃むとくさるおひてあらく

さら花れ目とるかさね表くらを ○おひ

こけひとくさる表くらを ○さるのあわ

のよりむとくかさね ○萩のうさ

くさるおひてあらく ○萩乃むとくさるおひて

うさ。とそおへの花とくさるおひてあらく

○うとすつものむくき。○紅乃むとを
かさね。○二わぬれくかさね。○えひぢめは
ひとくき。○志ろといひくはら。

むくかき糸いすくは織物いひ
うすめあわや下はらひとくむり
かさねい下はら平絹うは物おと月也
又あやと何きよてもそめてく月は
ありらや冬うらまは月の中がで
こは六月まく女席花萩ハ紙蘭舎ら

秋の中めきうつくは小うらと皆
すー織物或ハ二重織物とく人さは
ちりらゆかり

九月九日より夜乃色

菊りみら又何とて色みまぬすくはうと
さつ入く月ひはらうはうひゆん
十月ノ末五夜まくお夜いろく

菊の御衣うへをさう白。○紅葉重八黄葉三
山吹の
一重すう一合てハかり。○志ろ菊あはて白
裏すう

○黄さく こめて黄 うらわと

○ういりの菊 表中紫 うら青

黄紅葉 あつて黄さく うら守り

○櫃紅葉 表とつう うら黄 ○蛭 カエデ

紅葉 あつて黄さく うら黄

けがれつらくはさのまをれ又の西に

志引 かたりぬ

春冬乃花やうら

冬秋お并れ日 あつて黄さく うら守り

さくかさねの衣。山吹のさね。あつたね乃衣。多くみれ衣。うら白六乃衣。松うさね乃衣。梅ひの衣。さひ深の衣乃服用之は十月より又さく あつて黄さく うら守り ○紅梅の草 あつて黄さく うら守り

○黄さく こめて黄 うらわと

○ういりの菊 表中紫 うら青

○櫃紅葉 表とつう うら黄 ○蛭 カエデ

○紅葉 あつて黄さく うら黄

○志引 かたりぬ

○春冬乃花やうら

○冬秋お并れ日 あつて黄さく うら守り

○さくかさねの衣。山吹のさね。あつたね乃衣。多くみれ衣。うら白六乃衣。松うさね乃衣。梅ひの衣。さひ深の衣乃服用之は十月より又さく あつて黄さく うら守り ○紅梅の草 あつて黄さく うら守り

○黄さく こめて黄 うらわと

○ういりの菊 表中紫 うら青

○櫃紅葉 表とつう うら黄 ○蛭 カエデ

○紅葉 あつて黄さく うら黄

十月より入前までの草

あど死む人 菊の夜 ○紅乃日く魚 紅葉室八

・芙蓉・うつろひ菊・芙蓉紫 ○とつり花 かえて紅葉

去冬の表著のりく

白死うもご 皆くまおの夜乃附著く此所五月 ○蒨黄

表著 くまおの白ひの夜。紫れうとつりの夜。つやと紅梅乃夜

うらつられうもごの夜。紅梅乃ひの夜。山くま ○櫻乃うり花 紅のうり花

まゆひの夜。松かさの夜 ○裏山吹乃うり花 はる白ひの夜。花山吹れ夜

えひは乃夜の附著く ○紅梅れうもご 梅の夜。はるうもごの夜。多くみひの夜

表著ハ衣の上よ
あつかりりり
折衣とかさめり
附らうり衣れよ
小きりあり

○えびづめれ表著 あつといくまの夜。紅梅白ひの夜

下よ ○櫻蒨黄のうり花 柳の夜 ○眞陵れ表著 ギョレラ

うら山吹れ夜 ○松うさね乃うもご くまお并けり乃

十月より入前までの ○蕙芳れ表著 うら白ひの夜。松

乃るも下にて記す ○紅毒乃うり花 さつら蒨黄れ

又又月より秋まきれ 友乃うりめうり花の文 夜の附著く

松重れうり花 あつさの夜れ附著く ○くれお并れ

うり花 卯の花乃 内用く

とゞりれうらた

わやめの二重うらた。かてこのひとま。萩のよそまねはる人かき。の附用。○とゞ

かての表意

すうのひとま。の。萩のひとま。二わあはる人まね。内用。かりり。○紅乃

うらたき

かてのひとま。白たむ。かての附用。なれ初用。あて。○こたき

表着

うらたき。の附用。○二つあ乃うらた

おのむ。室の附用。○白乃うらた

花らむの草。えひそめのひとま。室の附用。十月より。又。あて。衣。うらた。用。下。記。

十月、紫五節、まき、乃、表着、の、は、く

表黄裏青
黄わらうらた

菊のひとま。の附用。○菊のうらた

の附用

○黄きくの表意

衣の附用。○あつた

黄きくの衣

○松うきぬうらた

うらた。菊の附用。○萩

の附用

芳乃うらた

黄お紫の衣の附用

○えひそめれ表意

衣の附用

○紅の表意

かえてのうらたの衣の附用

うらた小褂ハ二重かり。扱又か。織扱とも用也

つとま。ま。人の表着小褂ハ必二重織物あり

春冬乃小褂色く

松重れ小うらた

皆れ。か。井の衣。乃。附用。又。八月より。林。と。れ。下。記。○赤久れ

小褂

お白の衣。梅の衣。重。ま。ら。う。の。紅。梅。の。衣。柳。の。衣。乃。附用。又。八月より。秋。と。用。又。同。下。記。○えひ

扱め。れ。小。う。ら。た。き

紅のうらた。の衣。つ。か。お。梅。乃。衣。お。梅。白。乃。衣。山。吹。の。衣。の。附用。又。又。乃。初

又十月より。又。衣。と。の。下。記。

○り。き。れ。乃。小。褂

紫白の衣。衣。衣。五の衣。上白。六の衣

小褂うらたの
とよま。う。ら。た。の。也
但。う。ら。た。と。着
附。小。褂。と。着
さ。り。例。あり

の付 ○紅毒の小うららひらきのうすすの衣 ○すえひの衣の付

らうら小褂らうらの衣の付 ○松かきの衣の付 ○柳のの衣の付

○あとの衣の付 ○あとの衣の付 ○あとの衣の付

○山のの衣の付 ○柳のの衣の付

○紅のの衣の付 ○紅のの衣の付

友のの衣の付 ○えひの衣の付

又月のの衣の付

又月のの衣の付

二あのの衣の付

○蘓のの衣の付

乃小のの衣の付

○女のの衣の付

乃小のの衣の付

○松のの衣の付

十月のの衣の付

芙蓉のの衣の付

本文衣のとり
単とちうの非也
単の上に衣が
一。又袴と
さうゆ近代の
身に小袖と云
て袴と着
あひひてその
次は単より衣
打衣表著小袖
と着かさぬ也

裏に引へると
いつの板引は
するまあり

ゆららの衣
乃付用く

○夏は小うらら

夏もみらの
衣の付用く

小うららと事「衣のうらふむと人の葉の上に」
うららとぬお衣の上はうららとぬお衣のうら
小袖とまうらふ袴とさうなり寸法は次第小
上にさうらとぬお衣のうららとぬお衣のうら

むと人の事

夏は紅或はこれ引へるとなり冬は行きて色単
紗りとも又ひとかた糸よ倍本かさぬる事も
けり大掖此かきとい大方ははさまりと事

打衣とさうらに
衣の上はさう
けり略さうら
も幸あり

おらぬ事

作ると但衣のうららとてうらら小袖と時
よりてぬお衣のうららとぬお衣のうららとぬお衣のうらら
肝要は後

紅のあやと打てかきゆれは雅人^{ユキキ}とぬお打

なり夏冬ふかさうらとぬお衣のうららとぬお衣のうららとぬお衣のうらら
常にいひとぬお衣のうららとぬお衣のうららとぬお衣のうららとぬお衣のうらら
又むとぬお衣のうららとぬお衣のうららとぬお衣のうららとぬお衣のうらら
うららとぬお衣のうららとぬお衣のうららとぬお衣のうららとぬお衣のうらら
るはさうらとぬお衣のうららとぬお衣のうららとぬお衣のうららとぬお衣のうらら

源氏物語の巻末の抄録

張袴とは紅の平
絹と板引と云ふ
と濃張袴も
亦板引かり等
の六緋のくは
とよも八織生
乃紅の袴あり
裁縫も着用も
多かり

袴の事

此乃とも袴ハ祝の時濃張袴ハ襲ケのスミ此
紅の袴ハ夏冬同く冬は御衣ハ領或ハ六
領或五以下此と云ふと云ふと云ふなり夏は
ひとくかきねのうへに袴と云ふ近代ハ小袖
と着用と仕引はくろふ時ハ御衣と云ふと
物具ハ冬はひとく夏は倍木うへに裳唐
衣小腰引ゴ等晴の時無きなり
女房ハ襲の時ハひとく表著紅のうらき又唐

志のつとハ裳末
の具なりハ
物ハ云ハかり

上藤女房はま
とゆると云ハ
まのら未のら
の織物ハ云ハ
比すの裳と
云ハかり

志びるごみの

衣ホ云ハて裳と云ふ例なり程同くハ表襲
単張袴と着せは只衣乃と云裳かると云と
義する例も有り 裳うらきぬハ
下仕も云也
志びるごみの
志びるごむも裳の事なり男ハ袴の上に云
女ハかき裳の上かきあり褶と書なり
主人ハかき衣若き時小袖と云ふなり唐衣ハ
小うらきと云着はる事あり
義按 ころもぬらうと云の上かきゆる尻

源氏物語の巻末の抄録

源氏物語 卷之六 藤原朝臣 御衣

十一

有りぬもほも
けり女房の織物
のひらこさぬと
ゆりてさうまぬ
みりつてひら
ひらひんのまひ
はのうさぬ
ひらひんあぬ
もゆりぬと
帯のひらひり
雅すけ紫雲抄
ゆりぬと

うたぬかり九背の立推乃ひらりに付かぬ也
唐衣無く次は裳れけ帯とくひよか多
かり掛帯はうさぬと同地にて繡あり
裳は後へ引りり裳乃右よとく引りは
引りりといふ裳も色文くひらり圖別あり
表著は織物なりへ内の耐女房五節の童女等
織ものとりかり 内裏中下臈の織物あや
とゑざりなり

扇乃事

義按 女のあひさひらこめ扇といひく地は檜の板

凡二十九枚とどらて胡粉地めて金泥泥薄

朱黛緑青がどく彩色とそは絵は強定ら

事あり大形絵の物と書りりいゆくと

糸とてとらうらうらとあふれ端はゆるい

ひすひあて紐さげてそとに松栴蔔の作り

枝と付りりかおめは蝶小鳥と打りり先書

みか多れは今さ紙補ふ

かさみの事

源氏物語 卷之六 藤原朝臣 御衣

十三

今接色とい紅の濃しうとれと半りうと

花田 ○紅梅 十一月ヨリ ○蒼紅梅 面紅梅 裏蘘芳 ○裏倍

紅梅 裏紅 ○今様色 濃紅 ○卯花 同柳 四月 ○菖蒲 面

裏紅梅 五月 ○花橘 面朽葉裏 ○瞿麥 面紅梅裏 ○

青朽葉 面青丹黒り ○萩 面蘘芳 ○萩經青 經

緯蘘芳 裏青 ○女郎花 經青緯黃 ○白菊 面白裏蘘

芳菊 九月 ○黃菊 表黃 ○移菊 面中紫 ○黃紅葉

面黃裏蘘 ○櫛紅葉 面蘘芳黒 ○蝦手紅葉 面

青裏 ○青紅葉 面青裏 ○槿花田 ○黃朽葉 ○

赤朽葉 ○苔色 面香黒三 ○檜皮 面蘘芳黒 ○

海松色 面萌木 ○虫襖 面青黒アリ裏 ○濃蘘

芳 ○薄蘘芳 ○裏濃蘘芳 ○蘘芳香 面蘘芳 ○

黒木賊 ○青木賊 ○黃木賊 ○赤色 櫛 茜トニテ

○篠青 同柳 ○氷 面白マツガイ ○雪下 上白裏紅

○枯色 面白裏 ○枯野 面黄裏淺青 ○秘色 琉璃

○比金襖 面青黄 ○紫苑 面薄色 ○鳥子重 面

瑩裏 ○搔練 表裏紅打或裏 ○萌木 濃

香 ○香文濃 ○瑠璃色 ○二藍 赤花青花 ○薄

色 ○淺黄 ○青鈍 ○濃打 濃紫打 ○花田 濃薄

虫襖或人云此虫いされりよもやむりかしの色いさる

搔練火色ハ各別して表裏紅打火色りり又裏張りりハ

ういわりかり薄色トハ必紫のうすことりり

りりきとまこえのほえり

花鳥云萱草色
藍と藤芳ア
だつていれて
深きなり

○薄青 ○薄青文濃 ○若蝦手 ワカエテ 面薄青 裏紅 ○龍膽 リシタウ
面藤芳 ○白襖 ○水色 ○苗色 ナメ 薄萌 ○若苗色
裏青

○青色 阿安紫 アクラ サス又号麴塵 ○青丹 アラニ 濃青丹 黄 ○紅
出源 ○赤櫃 ○魚陵 ギョレウ 山鳩 ○木蘭地 黄椽 ○虹 ニジ

葉重八 黄三山吹 濃薄一重 紅濃薄一重 藤芳一 ○紅 紅梅 ヨリハ
落栗色 源氏 ○當色 私云謂位色是也見干衣服今義解又當色如木モ

○濃色 織物經緯 共濃紫 ○薄色 經紫 緋白 ○半色 經緯 共薄

紫 ○花田 淺黄 ○薄青 經白 緋青 ○香 就老若 有淺深 ○蒲 大略同
葡萄添 經赤 緋紫 ○赤色 經紫 緋紫 ○萱草色 柑子色 大略同

聴色とい紅も
ほめとすすれ
とい濃色と
禁色なり。支子
深の濃色も禁
色とて薄ハ
色といひたり

藤芳ダウサラ 入テ添ト云云 ○鈍色 御説ウツシ花ニテ添也練也又云花田添也又或云青花ニ
スミヲ入ル也又青ニ色アリ青鈍 ○聴色 紅ノウス
花田濃色也 尼ナトノ用ル色ナリ 玉葛 ○支子御衣 支子色 支子色
云也尼君ナトモ襲ノ衣ニハ 紅用也 源氏玉葛卷見エタリ

以上

藻鹽草拔書

正月

梅かす祢 おもてらね紅裏の梅次第 ○一重梅 表白
け衣ハら一のうら若月れと急より急る かり衣乃下れ紅梅と急りて急るあり ○松かすね おもて

紫と白り又青とありけ夜と八年の始りなる
 故にあみくるとしてなるなりさうの衣れ色あり ○柳室表
 うそ青 ○花柳の衣おもて白 ○若柳衣う
 若 ○若草乃衣おもてうそ青裏こゑ青い
 二月二月初はまて字細か

二月

はくはく衣おもて白裏 ○紅梅おもて紅 ○まろ
 梅おもて紫 ○うそ花梅おもて白 ○かむ梅
 おもて紫うそ青いさぬかきひさし
 従うさひひり 古今ゆかり ○夜うそおもて紫
 ○志く藤おもてうそ紫裏こゑ紫いさぬ 二月三月
 四月紫うそ青いさぬかきひさし
 ○董乃衣おもて紫 ○はは董おもて白 ○は
 裏青紫

トれ衣おもて白 ○くらつと面むらさき裏
 裏青紫

若はト表紅 ○白はトおもて白
 裏紫

三月

紫の夜は三月を
 志く乃さぬおもてうそ青裏こゑ ○山吹の衣おもて
 裏青紫 ○花山吹裏青うそ ○若山吹面青
 裏青紫 ○さつらびの衣面はうそ青いさぬ
 色代用ひらり

四月

志くかさね文夜の夜なり卯花の心 ○うの花衣

菅家万葉集歌
曰蟬之音聞者
哀那夏衣薄哉
人之成砒思者

うらみりてあらくし或ら
表白く裏青をけり ○ **さみ乃羽衣** あや衣とよと
尸なりけきくのすみ原氏しそきすつた花只うらく
すしはるきの衣とよ流る次川のがうれ衣とすしは連衣 ○
あかえぞれき忠 面薄萌木 裏薄紅梅 ○ **杜若の衣** カキスツタ ねめて 薄麗木
うら毒 ○ **やうんのさぬ** おめて白裏紅梅 かのもりやせ ○ **葵**
乃衣 おめて薄青 うらうとよ ○ **きらむれ** 表白裏青 衣は月も用き
○ **志やうび** おめてくれあお うらうとよ

五月

志やうぬる糸 おめてあね うらうとよ ○ **花あやめ** 表白く 裏薄紫
○ **根志うぶ** おめて白くうら紅み白きうとよ うらうとよ

定まりてこころをい
白さにくさかり
おへまれ衣 面裏うら ○ **おぞこ乃衣** おめて紅 裏薄紫
○ **花おぞこ** 面紫 裏紅 ○ **かろおぞこ** おめてうら 裏おぬけ
衣にうらき ○ **よもぎさね衣** 面うらり花うらみき 裏えこ或おめて白く
うら ○ **梅り乃き忠** おめてうらうとようらうとよ

六月

夏衣の衣 おめてあや 裏ひうと ○ **ころも色れ衣** うらうとよ
さぬも友うら ○ **むすりかき** この衣すし乃衣 ねいろ
とぬひもをうらひのう
かさぬり友なり

源氏男女装束抄後附

七月

ときね衣

れりてきり
裏こら萌木

○かざの衣

おりて裏
とえん

○萩

かきぬ

面は裏着は赤い衣ハ
八九月まで用一

○花きぬ

おりて白く裏着は
花田なりこれハ

八月

八月

きぬ

おりてあき
うりゆき

○散むら

おりて赤
裏用

○き

きわ

れりて花田
うりゆき

○志のぶ

れりてうきり
うりゆき或はきりも

○きりふん乃衣

おりて花
花田裏着

○かろ

名どりふき
うりゆき

きりか

きりか

きりか

きりか

きりか

きりか

九月

菊

れりて白
はかきり

○くまお丹菊

おりて赤
うりゆき

○黄菊

れりて黄

○うりゆき

面紫裏白
十月維摩會まで用たり也

○はば

おりてこれ
九月まで用たり

○志のぶ

面紫裏
とら

○き

面黄裏うすり
黄あり又山鳩

○黄紅紫

面黄
裏青

きぬ

面黄裏
也裏紅

○とみ

おりて紅
うりゆき

○はば

おりて花田

○あき

面花田裏用
一年考のきりゆき
また八月まで用たり

十月

きりか

その衣丈は
おりてうきり
おりてうきり
おりてうきり

源氏男女装束抄後附

○かき煙の夜 面黄うらうらとまきし或は白くも
 けり けり ○浦北菊
 夕うら 夕うら 一但うけらぬ菊とておきて紫うらまき或は美
 かり是十月申月けり菊月乃海あり又紅菊けりは月
 まては美うらけり
 きたの月よ記を

十月

○おほりかき おもてきこれ子らうらうら
 けり けり ○もつゆさ
 かりてゆき かりてゆき 是をいさうらうらみあり或はかりてまろく
 うら うら 是か井もけりうらにまされもいさうら
 こころむい け月ハお梅と月初めけり又帝より後こころむいと
 けり けり 仍今月ハ紅梅の月乃うらめけり

十一月

梅 もくとい面や 裏序紅梅雲の衣とくも
 早梅 早梅 唯くもは月より用定けり ○雪れ下

雑

かりてゆき かりてゆき 初雪と同一又紅梅とくも又おもてあうらうら
 のら のら ○ほむれ おもてき 裏赤もまき
 けり けり 但冬立前より後これと
 けり けり もあり

松 まつ ね ね おりてき おりてき 裏赤雲のうら うら け け あり ○雪

く く さい さい 面 面 して して 美 美 め め とも とも さ さ かり かり 六 六 位 位 まで まで 用 用 ひ ひ たり たり ○ひら

かり かり て て け け ち ち り り け け せ せ め め ○六 六 け け の の 後 後 本 本 あり ○冬 冬 後

う う そ そ け け ○水 水 の の 色 色 ○海 海 松 松 の の 色 色 思 思 へ へ る る さ さ ぞ ○

く く り り の の 後 後 紫 紫 め め の の 紅 紅 色 色 ○娘 娘 ぎ ぎ う う の の 色 色 思 思 へ へ る る さ さ ぞ

源氏男女装束抄後附

お井ねとてい
ひうきだ
くか回え
○志くくいろ
○ひりり
○

以上

女官餽抄。胡曹抄藻鹽草之拔萃者渡邊

康映後附也今又少補且所所加鰐頭耳

壺安著



源氏男女装束抄後附終

東都度神應

